

## 「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

### 第128回

『人生の意義と目的の『静思』 ～ 『新渡戸稲造セミナーハウス』創設 ～』

2022年9月20日夜(18:00～21:00)、筆者は、代表を仰せつかっている『南原繁研究会』にzoom参加した。読書会は、今回は、『国家と宗教』①著作集I pp. 1-52であった。日々勉強である。文化の日(11月3日)は、毎年、学士会館でシンポジウムが企画されている。今年の『第19回南原繁シンポジウム』のテーマは、『日本の近現代史と南原繁—「明治維新から敗戦まで」と「戦後日本」における役割—』である(画像)。「本年は、明治維新から敗戦までが77年、敗戦から本年(2022年)までが77年、という節目の年に当たる。それは、明治維新以来の国家体制が崩壊する過程、即ち「明治維新から敗戦まで」と、その敗戦を乗り越えて日本が歩んだ道、即ち「戦後日本」に相当し、その全体を見直すのにふさわしい年であろう。」と謳われている。タイムリーなシンポジウムとなるう!

2022年9月21日午前中『柏がん哲学外来』(柏地域医療連携センターに於いて)に赴いた。3組 x 3人 = 9名との個人面談の機会が与えられた。大変有意義な貴重な時であった。スタッフの皆様の誠実な奉仕には、ただただ感謝である! 2022年9月22日は、ICU(国際基督教大学; 1949年創立、1953年大学設置)に寄って、友人の常務理事(富岡徹郎氏)と食堂で昼食をした。軽井沢での『新渡戸稲造(1862-1933)セミナーハウス』創設の夢話で大いに盛り上がった。午後は、隣のルーテル学院大学(1964年設置)での、『現代生命科学II』の授業(3時限目、4時限目)に赴いた。3時限目では、スライド用いて授業を行なった。

【『がん病理学』は「がん」に関するの学問で、『形態』、『起源』、『進展』などを追求する学問分野である。当然がん研究者だけのものではなく、一般社会の人々の為の学問でもある。がん病理学者が『がん』をどの様に考えるかは、とても大切なことである。なぜなら『がん』に対する概念が世界観、人生観、ひいては日常の決断や行動をも時には決定するからである。「がん」の『起源』と『進展』を学ぶことは、ある意味では人生の意義と目的の『静思』へとも導くものとする。これこそ、『がん病理学者の社会貢献』である。】と語った。4時限目は、教科書『カラーで学べる病理学』の『腫瘍』の章を音読しながら進めた。『教育とは、すべてのものを忘れた後に残るものをいう』(南原繁:1889-1974)の心得の復習の時でもあった。

## 第19回 南原繁シンポジウム

# 日本の近現代史と南原繁

—「明治維新から敗戦まで」と「戦後日本」における役割—



本年は、明治維新から敗戦までが77年、敗戦から本年（2022年）までが77年、という節目の年に当たる。それは、明治維新以来の国家体制が崩壊する過程、即ち「明治維新から敗戦まで」と、その敗戦を乗り越えて日本が歩んだ道、即ち「戦後日本」に相当し、その全体を見直すのにふさわしい年であろう。時あたかも、ロシアのウクライナ侵攻があり、戦後の世界の安全保障構想、国家間のあり方を含む人類そのものの在り方自体が再検討されるべき時期となっている。戦争の深い反省とその根絶を胸に、平和的民主国家としての日本の再生を訴えたと言われる南原繁であるが、改めて近現代史の中での南原繁の位置づけを図りたいと考える。そこで、今回のシンポジウムでは、日本の近現代史に造詣の深い、ノンフィクション作家の保阪正康氏と東京大学教授加藤陽子氏のお二人に講演をお願いすることとした。保阪正康氏には、終戦まで、戦後における市民の立場から見た南原繁、加藤陽子氏には、激動の昭和史において南原繁が果たした役割とその意義などを論じて頂く。

第2部では、これまでのパネル・ディスカッションに代わり、参加者の質問に、お二人の先生からお答えいただき議論を深めることといたします。多くの方のご参加を期待します。

**日時：**2022年11月3日（木・文化の日）13:00～16:50（開場 12:15）

**場所：**学士会館 210号室

東京都千代田区神田錦町3-28 電話 03-3292-5936

[ズームミーティング方式でオンラインでも参加いただけます。](#)

**参加費：**会場での参加 一般 1,000円、学生 500円

オンラインでの参加 無料

いずれの参加でもお申し込みが必要です。（裏面ご参照）

---

**主催：**南原繁研究会（代表 樋野興夫 順天堂大学名誉教授）

**後援：**岩波書店、学士会、東京大学出版会、公共哲学ネットワーク

**協賛：**富山県立小杉高等学校同窓会